

音読による授業構成の試み(4)

—安城時代の新美南吉・詩人として教師として—

渡辺和靖

社会科教育講座 (思想史)

An Approach to the Construction of Class by Oral Reading

—NIIMI NANKICHI as an Example—

Kazuyasu WATANABE

Department of Social Studies Education (Intellectual History)

はじめに

本稿は授業実践の記録である。

新美南吉はわが愛知県の生んだ有名な童話作家であり、その作品「ごんぎつね」は教科書などにも採用されて広く知られている。とくに愛知県では南吉についてはよく知られている。

郷土の偉人について語ることは、聞くものの関心を強くそそるので、授業をするうえで非常に有効な手段である。すこし前、岐阜駅前の十六銀行の教養講座で、〈音読による授業構成の試み〉シリーズの一つとして、川端康成が婚約までして結局は破談になった、東京でカフェの女給をしていたが岐阜のお寺に引き取られた伊藤初代との経緯について書いた〈みち子もの〉の諸作品が『伊豆の踊子』を制作するうえで大きな役割を果たしたという話をしたとき、地元の参加者の大きな関心を引いたという経験がある*。自分の住んでいる土地が舞台とあれば、それなりの興味を喚起することができるのは当然であろう。

ただ、郷土の偉人というとき、そこに一種の危うさがあることも否定できない。郷土の偉人ということだけが強調されると、その人のもつ固有性と普遍性がともに見失われてしまうことがあるからである。固有性というのは、風土性に限定されないその人の独特の個性であり、普遍性というのは、風土性に限定されない歴史におけるその人の意義、価値、役割のことである。

その危うさには二つの場合がある。一つは、それほど重要性のない人物を郷土の偉人ということで誇大に評価してしまうことであり、もう一つは、高く評価されるべき人物が郷土の偉人として矮小化されてしまうことである。南吉の場合は後者である。

新美南吉は「ごんぎつね」があまりにも有名であるため、それ以外の、たとえば詩人としての南吉はほとんど知られていない。南吉の詩、とくに安城時代の、

教師としての体験を踏まえた生徒との心の通いあいを描いた詩は、他の詩人には見られない独自のそしてすぐれたものであり、忘れられてはならないものである。また〈久助くんもの〉として知られるこの時期の童話は、少年から大人へと成長していく微妙に揺れ動く心理を描き、他の童話作家には見られない独自のそしてまたきわめてすぐれたものである。これも南吉を語るうえで忘れてはならないものである。

新美南吉は、故郷の偉人であると同時に、日本の近代においてきわめてすぐれた童話作家であり、詩人であったことをここで再確認したい。

第一章 生徒詩集の発刊

新美南吉は、1938(昭和13)年4月から、愛知県立安城高等女学校(現安城高校)教諭として赴任する。英語、国語、農業を、そして南吉自身の希望で一年生の作文も担当したようである。

安城時代の南吉は病状も比較的安定し、また職を得て生活も安定し、創作力も旺盛であった。この時期までの南吉の作品は、主にノートや日記に記されたものが多く、その多くが未発表であったが、1939年2月に生徒の作品を集めた生徒詩集第1集『雪とひばり』を発行しその巻頭に自分の作品を掲げ、5月からは『ハルピン日日新聞』に詩や小説を掲載するなど、作品を公表する活動が活潑になった。これが異聖歌の注目するところとなり、本格的に童話を執筆するようになったのである。

2月1日制作の詩「生れいでて」。

生れいでて
舞ふ蝸牛の
触角のごと
しづくの音に
驚かむ

風の光に
ほめくべし
花も匂はゞ
酔ひしれむ

この作品は、南吉が制作する生徒詩集第1集『雪とひばり』の冒頭に「はじめに」として収録された。

歌われているのは、若いみずみずしい生徒たちの感受性である。生まれたばかりのカタツムの触覚のように、滴の音、風の光、花の匂い、触れるものすべてに震えるような感受性をもって対することこそが詩を作ることの原点であるというメッセージを南吉は生徒たちに送っているのである。

「淡雪」は2月12日制作。

大府の駅の
からたちの垣根に
春たつ あした
淡雪はふれり
北より汽車は
入り来りて とゞまり
またするすると去りゆくなれど
わがおもふをみなは
その汽車にのりをらず
かのをみなは遠きみやここにあり
来むといひしにあらねば
せんなきながら
おもへどもすべなきながら
からたちの垣に
ふる淡雪の
ふりみふらずみ かそけくて
ついにとゞまらず

帰って来なさいといったのではないからどうしようもないのだけれど、つつい大府の駅に来て東京の方から入ってくる汽車の乗客をつい眺めてしまう。ここには、特定の女性への恋慕の情が記されている。その恋が実りのない一方的なものであることの悲しみが伝わってくる。

2月18日制作の、3月に発行された生徒詩集第2集『縁側の針』に収録された「合唱」。

私ハ新シイ背広ヲ着テ
立テツテキル

少女達ノコーラスガ
ユルヤカニ光ツテ右ヤ左ニ流レル

少女達ノコーラスガ届クトコロカラ
雲雀ガノボリダス

少女達ノコーラスガ届クトコロニ
堇ガ落ちテキル

少女達ノコーラスハ
小川ヲ越ス

遠クニ白イ牡牛ガ見エル

私ハ少女達ノコーラスノナカニ
花東ノヤウナ心ヲ抱イテ立ツテキル

少女達ノコーラスハ私ヲスギテ流レ
少女達ノコーラスノ届クトコロカラ
コトシノ春ガハジマル

少女たちのコーラスは、自らが教鞭を執る学校での実景と見てもいいが、むしろそれ以上に、ここには、新しい背広を着て教師として少女たちの前に立つ南吉の、少女たちへのメッセージが込められているというべきであろう。——あなたたちの制作した作品は、コーラスのように私の心に響き、私を幸せにしてくれますよと。

生徒詩集に収められた作品について、大野秋紅は『安城市図書館だより』(1969年3月)に掲載された「新美南吉ノート」でつぎのように述べている。

生徒詩集に南吉自身の作品としては、定型的な韻律詩を多くのせたのは、いわゆる大人の詩と童謡の中間を狙った少女趣味に合わせたもので、文語のもつ格調の端正さとリズムの美しさによって、豊純な情感を生徒から引きだそうとしたものようである。南吉詩の同時期の散文詩に比べれば調子を下げたものであるが、指導詩としての性格からしていたし方のないことである。

しかし、『生徒詩集』掲載作品が、生徒たちの指導を意識して調子を下げたというのは首肯しがたい。

南吉が、生徒詩集に収めた作品と、それ以外の作品を意識して区別していたことは疑いないが、それは調子を下げたのではなく、生徒たちに対するメッセージをこめたものと理解した方が正しいだろう。また「散文詩」という言葉の使い方も間違っている。正確に言えば「自由(律)詩」であろう。

この時期、南吉の作品に2つの傾向を指摘することができる。1つは、安城高女の生徒たちへのメッセージをこめた作品、これは教師となって初めて生まれたものである。もう1つは、おのれの孤独な内面を告白する作品、これは以前からの継続である。

4月17日制作と推定される「歌」。同日の日記に、

風呂を出て裸でリングをかじつてみるとどうも
ききなれたメロディーが聞えて来る。野村と近
江がうたつたとんとんとろりこといふ子守歌ら
しい。

(中略) うたといふものは何といいものだらう
と思つた。すぐ一篇の純粋な、下手な詩が出来
た。

とあるのはこの作品のことである。

夕闇の中から
やさしい子守歌が聞えて来る
風呂からあがつて
裸で林檎をたべてると
木立ちの向うから
細いやさしい歌声が聞えて来る

いつか聞いた歌だ
誰かが歌つた歌だ……

さうだ私の生徒、
三月静岡へうつついつた
あの黒い眼の少女がうたつた子守歌だ
とんとんとろりこ
とんとろり

あの少女はさう歌ひ
私は悲しくきいてゐた
別れもまちかい日だつたが

私はちやんと知つてゐた
私達はあまり年が違ふので
私の言葉はあの子に通じないことを
あの子の言葉は私の心にとゞかないことを

だがあの歌を
しみじみあの子が歌つたとき
それはあの子の魂のしんに触れ
私の魂のしんに触れ
それらは一つのトリムをうつた

それならばあの子
私はあの子を理解しなかつたと
どうして云へよう

とんとんとろりこ
とんろろり

美しい子守歌よ、やさしい旋律よ、
私と私の生徒だつたあの少女の
お互ひの魂を共鳴させえた
不思議なるものよ

私はここに、たまゆらの深さを知り
生命の価値を知り、
この世を悲しくも美しいものに思ふ

懐かしい子守歌がまだ続いてゐる
夕闇の向う

木立の向うから
ほそくあえかに聞えて来る
やさしく甘く聞えて来る

子守歌は、南吉の詩の象徴になっている。詩を通して生徒たちと交流できたかどうか、南吉には自信がない。しかし南吉は、詩が人間の心と心を繋ぐ力を持っていることだけは確信することができたのである。

第二章 生徒詩集の廃刊

『ハルピン日日新聞』5月4日号に掲載されたと推定される「ねぎ畑」を見る。

黒き土より
いくすぢのみどり
すどく
つきいでて
朝のねぎばたけなり

そのみどりこそ
しんしんと
うつくしければ
われらしまらく
をみなおもはず
すがしく
ねぎばたけのあはひに
こごむなり

ここには生々しい女のイメージがあり、断ちがたい未練が表現されている。南吉の孤独な内面が露出している。

5月25日から27日まで、南吉は、3年生の修学旅行に付き添って、京都・奈良・吉野へと旅した。6月1日に、これを題材として、「仔鹿」「鹿」「天女笛吹像——大和法隆寺にて」「笛を吹く天女の像に」「らむね——比叡山にて」などが制作された。

「天女笛吹像——大和法隆寺にて」を見る。

斑鳩寺のみ堂のおくに
掌にみつる天女が
笛吹くをきけバ
ほのほめき澄みまさるもの
七彩の虹なすものよ
あはれひとすじに
やさしくながれ
あが魂にふるゝほどに
あたゝかにふとふるゝほどに

法隆寺をとおして日本古代への幻想を表現した作品である。その点では三好達治の詩集『測量船』に収録された「鰲のうへ」のスタイルの影響が深い。

あはれ花びらながれ
をみなごに花びらながれ
をみなごしめやかに語らひあゆみ
うららかなのあしおと鰲音空にながれ
をりふしに瞳をあげて
翳りなきみ寺の春をすぎゆくなり
み寺のひさし薨みどりにうるほひ
ふうたく廂々に
風鐸のすがたしづかなれば
ひとりなる
わが身の影をあゆまするいし鰲のうへ

三好の作品と比較すると、南吉のものはいかにも素人っぽい。しかしたとえば、「らむね——比叡山にて」などには教師としての南吉の独自の視点があらわれている。

ころころ と
教へ子ら
らむね のむ
遠く きて
なつの ウミ湖
見しかなしみに
もの いはず たゞ
ころころ と
玉 鳴らし

女生徒たちが、ガラスの玉を鳴らしながらラムネを飲む姿を描く視線は、教師のものである。自らの寂寥感を生徒たちの上に重ね合わせている。

6月16日制作の「終業のベルが鳴る……」。

終業のベルが鳴る……
生徒等はランドセルを
背負ひみな行つてしまふ
おくれた小さい生徒も

汽車にのりおけるとでもいふやうに
両腕をつきあげてランドセルを
背負ひ 帽子をひつたくつて
いつてしまふ
あの子たちはどこへ帰つてゆくのだらう
あんなに大急ぎで
何があの子達の魂を抱きとり
その魂の孤独をなくすのだらう
私は
朝心に昨日の疲れの続きを
覚えながら、
昨日のうれひの続きを
ひきつぎながら一日を始めるのに
あの子達の魂を
何が日毎清新にするのか
生徒達が帰つてしまつて
登音もしなくなつた部屋に
私はほけんと残つてゐる
小鳥達の去つたあとの
一本の木のやうに

女生徒たちの新鮮な力強い魂に接して、それに感嘆しながら、誰もいなくなった教室で1人、1日の疲れに放心している。生徒たちには示さない自らの姿を率直に歌っている。

6月21日制作の「宿」。

若竹の 藪をまはると
ほら 見えて来た
この細い道に面した
小さい窓
鉄の格子に
擦硝子の窓障子
季節をすぎた匂ひすみれの
鉢もある
ほら ここだ夜の栖は
ほら ここだ 夜と、苦しみの
栖は
出来ることなら
知らない旅人のやうに僕は
ここをすぎてゆきたいのだ
何処か 遠くの
新しいくにへゆきたいのだ

南吉は教師としての下宿生活に、小さな安らぎを見出しながらも、どこか別の世界へ行きたいという思いを心のどこかに抱いている。それは詩人としての南吉の魂である。詩人は、つねに、現実とは別のもう一つの世界を求めているのである。

9月26日に生徒詩集第六集『星祭り』の「まえがき」

が制作されている。

さ、やかないとなみでしたが二月に始めた詩集——詩集といふのも可笑しい位のものですが兎も角第二、第三と続いて遂々第六まで来ました。だがもうこれで当分やめねばなりません。戦争のため我々が喜んで忍ばねばならない不自由の中に紙の不足があるのです。それが遂に学校の中にもやつて来た。紙商人はもう要だけの紙を持つて来てはくれません。何処にも紙がないと言ひます。詩が続かなくてやめるのではない、紙が足りないからやめるのです。だから紙が再び豊富になる時が来たら、そしてその時みんなの中に詩心がなほあるならば我々は再びこの細いとなみの糸を繰りたいものです。早くその日が来るといい。祖国のために。詩のために。

南吉にとってささやかな喜びであった生徒詩集の制作が、時代状況によって不可能になった悲しみと口惜しさが伝わってくる。

第三章 小説の試み

10月18日に「久助君の話」が脱稿され、『ハルピン日日新聞』に掲載された。のち童話集『おぢさんのランプ』(1942年10月)に収録するさい、改稿されている。ここでは改稿されたものをテキストとする。最初は童話としてではなく小説として執筆されたようであり、多少難解な表現がつかわれている。改稿によって童話として洗練された表現になっている。

小学校の4年から5年になる時、学術優等品行方正の褒美をもらった久助君は、父親に「学校から帰つたらすぐ、一時間勉強すること」と規則を決められていたため、勉強を終えて友だちを探しに行くが誰も見つからない。兵太郎君に会い「みんなは何処に行つたか知らんかア」と聞くが、「知らんげや」と言う。

久助君は、徳一君のところにも仲間達はゐないことが分つて、がっかりした。が兵太郎君の動作を見たら、きふに、ここで兵太郎君と二人きりで遊ぼう、それでもじぶん面白いといふ気がわいて来た。乾草の積んであるところとか、藁積のならんであるところは、子供にはひじやうに沢山の楽しみを与へてくれるものなのだ。

久助君が突然兵太郎君をくすぐり出すと兵太郎君も負けじとやり返し、いつの間にか2人でふざけ合っていた。

乾草の山は昼間ぢゆう太陽に温められてゐたの

で、そこにもたれかかつてゐると、お母さんのふところに抱かれてゐたじぶんを憶ひ出させるやうなぬくとさだつた。久助君は猫のやうにくるひたい衝動が体の中にくずくずするのを感じた。

2人が夢中になってふざけ合っていると、突然「しん」となる。

二町ばかり離れた路を通ららしい車の輪の音がからからと聞えて来た。それがはじめて聞いたこの世の物音のやうに感じられた。その音はもう夕方になつたといふことを久助君にしらせた。

久助君はふいと寂しくなつた。くるひすぎたあとに、いつも感じるさびしさである。もうやめやうと思つた。

夢の世界から現実の世界に引き戻される。その時、

兵太郎君は久助君のすぐ前に立つと、何もいはないで地平線のあたりをややしぱらく眺めてゐた。何ともいへないさびしさうなまなざしで。

久助君はびつくりした。久助君のまへに立つてゐるのは、兵太郎君ではない、見たこともない、さびしい顔つきの少年である。

何といふことか。兵太郎君だと思ひこんで、こんな知らない少年と、じぶんは、半日くるつてゐたのである。久助君は世界がうらがへしになつたやうに感じた。

兵太郎が見知らぬ少年に見えた。

いつたい、これは誰だらう。じぶんが半日くるつてゐたこの見知らぬ少年は。……

なんだ、やはり兵太郎君ぢやないか。やつぱり相手は、ひごろの仲間の兵太郎君だつた。

さうわかつて久助君はほつとした。だが、それからの久助君はかう思ふやうになつた。——わたしがよく知つてゐる人間でも、ときにはまるで知らない人間になつてしまふことがあるものだと。そして、わたしがよく知つてゐるのがほんとうのその人なのか、わたしの知らないのがほんとうのその人なのか、わかつたもんぢやない、と。そしてこれは、久助君にとつて、一つの新しい悲しみであつた。

慣れ親しんだ友だちが、一瞬、まるで知らない人に変化する。こんな、成長期にある子どもが日常の中でふと経験する感覚を、南吉はみごとに表現している。ここに南吉の童話のいちじるしい特徴と、きわめてす

ぐれた点がある。

第四章 教師として

11月24日制作の「支那漢口へ移つてゆく子に」。

お前が日本を去る日は
秋の空 紺ぺきに流れ
ひるも すずしく
蟋蟀が鳴いてる
お前を送るとてクラスのは
小さい教室に 花をかざつて
ともにならつたかなしい唱歌をうたふ
お前の親しかつたあの子に
花束を贈る役 命じたらば
頭をふつて 拒み
「泣くから嫌です」といつた
私はそんな 感傷を
好まぬけれど
真実ならば
しやうもない
お前が日本を去る日は
日本はいつものやうに
かうも美しい
お前は寂しいときに憶ひ出すのだ
海の東に
美しい、やさしい お前の
祖国のあることを
海の東に
五十余人の
親しいお前の友達がゐることを

生徒詩集がもし続刊されていれば、それに収録されたであろう、生徒へのメッセージを託した作品である。南吉の生徒への愛情の溢れた作品である。

同日制作の「冬の朝」。

病癒えて
あの子が
来るといふ朝は
さあみんな
教室の花をかへよう
しぼんだ菊は棄て、
白とピンクの冬ばらを
持つといで
みんなあの子の糞れを
いつてはいけない
いたわつてやれ
窓ぎわの
日なたの場所に
あの子の席も

移しておかうよ

この作品も、生徒へのメッセージを託した作品である。

同日の「指」。

指つつこんだ子が
云つて来る
その指出しなさいと
わたしがいふ
まだととのほぬ
冷たい指
わたしがぐつと
ひつぱると
その子がよろける
ヨヂム塗つてやる
おかつば頭下げて
いつてしまふ
足音が廊下のはてで
消える
わたしはまだ若い
教師
あの指握つた掌を
そつと開いて見る
なあにわたしは
たゞの教師
これは窓から流れ入る
金木犀の
織い香、

これは、女生徒について歌った作品であるが、教師としてではなく、若い一人の青年として、ほのかに異性を意識する自分をストレートに表現している。そうした思いを金木犀のにおいにまぎらせているところに南吉の純情がある。

生徒詩集の廃刊によって、自らの内面の思いをストレートに表白する作品と、生徒へのメッセージを託した作品とが、一つに融合しつつあることが確認される。

2月11日制作の「幸福」(B)。

障子の中で
リーダを読んでる
声のかはつた少年が

—Winter is over.
Spring has come.

障子にぼつと
あかりがさした
あたたかな蜜柑色に

—Spring has come.
Flowers are out.

妹は黙つて縫つてるか
お母さんは風呂を焚いてるか

—Flowers are out.
Flowers are out.

藁屋根にぺんぺん草が生え
ごらんよ 貨幣ほどの一つ星

さう、神様は忘れません
御自分の創られた傑作の上
かうして目印をおくことを

南吉が下宿で聞いた実景か、それとも少年時代の自分の姿であろうか、声変わりしたばかりの少年の読む英語のリーダー。童話的な風景が浮かんでくる。英語の部分が、リフレインとして快いリズムを響かせている。

南吉は、1940年3月14日の予餞会のために、「ガア子の卒業祝賀会—二年生が予餞会に上演するために」と題する戯曲を制作する。上演後の3月17日の日記に、

予餞会に二年生達に上演させるつもりで久しぶりに劇を書いた。五日ばかりかかった。四十枚の大作である。テーマは五年前二枚宛のカタカナ童話を書いてゐた時分考へておいたもので、鼬と鶯鳥とその他いろんな動物が出て来る。「ガア子の卒業祝賀会」こんなに面白く書たのははじめてである。我ながら悪い作ではないと思ふ。
(中略) 反響見てゐるとき大村さんや校長がクツクツと笑つた。あきらかに成功してゐると思つた。

とある。

鶯鳥のガア子の女学校卒業を記念して、祝賀会が開かれることになった。父と母は準備で大忙しで、グウ子に招待客を呼んでくるように頼む。

グウ子 かう云へばいいんですよ。ガア子姉さんの卒業記念にちよつとしたお茶の会を致しますから、お差支へなかつたら、どうぞいらして下さい お待ちしてゐます。

父 お前相当なもんだな。お母さんの子だけあつて口が達者だ。だが「ちよつとした」といふのは散文的でいかん。「ささやかな」と云ひなさい。(中略) 言葉つてものは大切だよ。例へば

「ちよつとしたお茶の会」といへばたゞ謙遜しただけで些も美しく聞えないよ。

父が初めに挨拶すると聞いて、母はそのメモを点検する。

母 第一あんたは云ひ方が大げさだわ。「紳士淑女諸君、梅花漸く綻びはじめ、鶯は古き谷の住家を出で……」なんて。それに、こんなことも不必要よ。「時局多端の折柄、諸君には日本精神の何たるかを……」なんて。ガア子が卒業することと日本精神と何の関係があるといふの。人が笑ふわよ。」

父 ここんこの一節は生かして貰へないかね。「時勢が時勢であり、事の性質が性質であるだけに……」

母 いません、いません。さういふ事は学校の先生の仰有るものよ。

父 手厳しいんだな。

しばらくして、みんなはやってくるが、犬は、イタチがいないと騒ぎ出す。イタチは最初からオナラが臭いというので、外していたのである。

犬 鼬君ほど一生懸命に社会奉仕してゐるものももしあつたら伺ひたいもんですな。出征兵士、帰還兵士の見送り出迎へ、子供日参団の指導、納税組合の仕事、中庭防空団長としてのお骨折り、日く何、日く何、全く数へるに違なしですよ。危険物を拾つて入れる箱を道の辻に立てたんだつて、実際にやつたのは彼ですよ。

犬の主張は正当である。

父 いや、名誉はよく解つてゐるんですがね。あの人は一つ悪い癖がありましてね。つまりなみなみならぬお尻をするんですよ。

犬 いや、お尻などこの際問題ぢやありません。名誉が問題ですよ。

豚妻 名誉はいい匂ひはしないけど、お尻は臭いわね。

イタチが呼ばれて、祝賀会はスムーズに進行するが、台所でひよここと遊んでいたギイ子がゴム鞠を誤って火の中に入れ、ボンと破裂させる。その音がイタチの尻と間違われ、イタチはやむなく帰っていく。

祝賀会が終わって、ガア子が免状を落とすと騒ぎ出す。そこへイタチがやって来て免状を届けてくれる。

ギイ子 さつき鼬さんがお尻したのね、あれ鼬さんぢやないの、あたしがついてたゴムまりが七輪の中に飛込んではいけしたのよ。

父 馬鹿たん！なぜそんな時云はなかつたんだ。
おいグウ子、まだ鼯君の姿見えるかい？
グウ子 え、土堤のこちら側を歩いてらつしやるわ。
父 おーい、鼯君、どうも有難う。
母 免状を届けて頂いてすみませんでしたア。
父 さつきのお尻、君ぢやなかつたんだよ。
グウ子 ギイ子のゴムまりがはじけたんだよ！
グウ子 あら此方見て笑つていらつしやるわ。

ここには、生徒詩集に収められた作品と同じく、生徒たちに対するメッセージが込められている。

第五章 童話への取り組み

「尻」は『ハルピン日日新聞』に3月23日から30日まで7回連載された。この作品は、明らかに、さきの戯曲「ガア子の卒業祝賀会」を小説に書き改めたものである。

級長である春吉は、5年生の冬に新しい先生を迎えた。

春吉君の学校は片田舎の、百姓の子供ばかり集つてゐる小さい学校なので、他所から来られた先生は、みな都会人のやうに思へたのだつた。藤井先生を一目見て、春吉君は息づまる程好きになつてしまつた。文化的な感じに魅せられたのである。(中略)「君」といふ言葉が春吉君をまた喜ばせた。何といふ都会風の言葉だらう。

春吉は藤井先生にいいところを見せようとしたが、ちょうどその時、村一番の尻の名人石太郎が、いつものやうな尻を放つたため、石太郎が注目の的となり、恥ずかしい思いをした。

立つてゐる春吉君は、その時云ひしれぬ羞恥の情に駆られた。自分の組に石太郎のやうな、不潔な野卑な非文化的な下劣なものがあるといふことを、都会風の近代的な明るい藤井先生がどうお考へになるかと思ふと、まつたく居たまらなかつた。

町の小学校との合同運動会にも、集団演技で頑張ろうとしたが、石太郎の失敗で町の人々に笑われた。

春吉君は一步門内にはいるときから、もう自分達一団のみすぼらしさに羞かしくなつてしまふ。何といふ生彩のない自分達であらう。友達の顔が猿みたいに見える。よくまあこんな、弁当風呂敷を爺さんみたいに背負つて来たものだ。まつたくやりきれない田舎風だ。

かういふ意識が、運動会の終るまで春吉君の中で続く。一寸でも自分達の不体裁なことを嘸はれたりすると、春吉君はつきとばされた様を感じる。

しかし、藤井先生も日が経つにつれて、都会的なセンスを失い、ついには石太郎とイタチ取りをするようになる。

その時春吉君は藤井先生がこの片田舎の、学問の出来ない、下劣で野卑な生徒達に至極適した先生になられたことを感じたのである。といつて別段失望したわけでもない。結局親しみを覚えてそれがよかつたのだ。

しばらくして春吉は、朝から腹の具合が悪くて、図工の時間に教室で音を立てずに尻をしてしまう。

うまく、誰も気付かずにみてくれ、ばよいがと、春吉君は密かに願つた。(中略)すぐに、臭え臭えといふ声が、四方に伝はつた。春吉君は羞しさで顔がほてつて来た。

いつもと同じ騒ぎが始まつた。尻えこき虫の石太郎が尻を放つたとき、寸分違はぬことが。春吉君はどうしていいのかわからない。もう成行に任すばかりだ。

しかし、石太郎が疑われ、騒ぎは済んでしまう。春吉は、勇気を出して言い出せなかつたことに、数日間悩む。

春吉君は、たゞ自分の正しさといふものに汚点がついたのが癪だつた。丁度買つたばかりの白いシャツに汚泥の飛沫をひっかけられた様に。

石太郎にすまないといふ気持や、石太郎は犠牲に立つて偉いなどいふ心は、全然起こらなかつた。石太郎が弁解しなかつたのは、他人の罪を被て出ようといふ如き高潔な動機からではなく彼が歯がゆい程ぐづだつたからにすぎない。

しかし、この事件以後、春吉は他人に対する見方が変わる。

だが春吉君はそれから後、尻騒動が教室で起つて、例の通り石太郎が叱られる時、決して以前のやうに簡単に、それが石太郎の尻であると信じはしなかつた。誰の尻か解らない、そしてみんなが、石だ石だといつてゐる時に、そつと通りの者の顔を見廻し、あいつかも知れない、こいつかも知れないと思ふ。

ここには、世界をあるがままに受け入れてきた、それまでの春吉とは違った春吉がいる。

さういふ風に、みんなの狡猾な顔を眺めてみると、何故か春吉君はそれらの少年の顔が(中略)涼しい顔をしながら、汚いことを平気でして生きてゆくのは、この少年達が濡れ衣を物云はぬ石太郎に着せて知らん顔をしてゐるのと、何か似通つてゐる。自分もその一人だと反省して自己嫌悪の情が湧く。だがそれは強くない。

心の何処かで、かういふ種類のことが、人の生きてゆくためには、肯定されるのだと春吉には思へるのであつた。

こうした結末を導くために、南吉は、春吉を、プライドの高い少年として描いてきたのである。しかし、ここで、南吉は、春吉のこうした態度を肯定しているわけではない。むしろ読者に、それでいいのかと問いかけているのである。「ガア子の卒業祝賀会」で最後にイタチの冤罪が晴れるように、南吉は、人々の狡猾な態度を認めていたのではない。

第六章 「川」——童話作家として I

南吉は、巽聖歌の主催する『新児童文化』1940年12月号に童話「川」(B)を発表し、本格的な童話作家として出発する。

久助君、徳一君、兵太郎君、音次郎君の四人が川の縁まで来たとき、音次郎君が大きな柿を取りだし、「川の中に一番長くはいつてゐた者に、これをやるよ」と言うので、3人は冷たい川に入った。徳一君と久助君は早々と出て来たが、兵太郎君はなかなか出てこない。

やがて、兵太郎君は、川岸まで歩いてくるが、その場で腰を折ってしまった。

ところで兵太郎君はすっかり身じたくができたのに、歩き出さうとしなかつた。ときどき痛みがおそふかのやうに、顔をしかめて、腹のところから体を折つた。

あとの三人は困つたなア、といふやうに顔を見合はせた。しかし、ほんとうに兵太郎君の体に故障ができたかどうか、三人は半信半疑だつた。

といふのは、兵太郎君はいぜんから、死んだふりや、腹の痛むまねがひじやうにうまかつたからである。

次の日、登校すると、兵太郎君は来ていなかった。

五日、七日、十日と日はたつていつたが、兵太郎君は学校へ姿を見せなかつた。しかし誰一

人、兵太郎君のことを口にする者がいない。久助君はそれが不思議だつた。五年間もともに生活した者が、ふいにぬけていつてもあとの者達は何事もなかつたやうに平気であるのである。だがこれがあたりまへのやうにも思はれた。

久助君は、川での出来事を先生に話したくなる。

ある時は自首したい衝動にひどくかられた。それはちやうど国史の時間であつたが、いつも面白きける国史の話が、心の中の煩悶のために、ちぎれちぎれになつて、ちつとも面白くないので、こんなに情けないめにあふのも、自分が秘密をもつてゐるからだ、言つてしまひさへすれば心は解放されるのだ、と思ふと、突如立ちあがつて「先生僕達三人で兵太郎君をだまして病気にしたのです！」と叫びたくなつた。しかし平常とすこしも変らないあたりの空気が、なぜかその衝動をおさへさせた。真昼間、心もたしかなのに、久助君は、自分のすぐ傍からもう一人の久助君がすすくと立ちあがつて「先生！」といひはじめる幻影を三度も四度もはつきりと見たのだつた。耳がじいんとなつて、両手に汗を握つてゐた。

2、3ヶ月が過ぎた。

三学期の終り頃、つひに兵太郎君が死んだといふことを久助君は耳にした。弁当のあと久助君は教壇のわきでひなたぼつこをしてゐた。すると、向かふのすみで話し合つてゐた一団の中から、「兵タンが死んだげなぞ。」と一人がいつた。

「ほうけ。」と他の者がいつた。べつだん驚くふうも見えなかつた。久助君も驚かなかつた。久助君の心は、驚くには、くたびれすぎてゐたのだ。

夕暮れ時になり、久助君の心に「漠然とした悲しみが漂つて」くる。

久助君の魂は、長い悲しみの連鎖の続きをくたびれはてながら、旅人のやうにたどつてゐた。

六月の日暮の、微妙な、そして豊富な物音が、戸外に充ちてゐた。それでゐて静かだつた。

久助君は眼を開いて、柱にもたれてゐた。何かよいことがあるやうな気がした。いやいやまだ悲しみはつづくのだといふ気もした。

久助君は、兵太郎君は死んでいないという確信を持っていたので、次の日、学校で兵太郎君が席に座っ

ているのを見ても驚かなかった。

兵太郎君は、海峡の向かふの親戚の家にもらはれていったのだが、どうしてもそこがいやで帰つて来たのださうである。それだけ久助君は人からきいた。川のことがもとで病気をしたのかしなかつたのか分らなかつた。だがもうそんなことはどうでもよかつた。兵太郎君は帰つて来たのだ。

休憩時間に兵太郎君が運動場へはだしでとび出して行くのを窓から見たとき、久助君は、しみじみこの世はなつかしいと思つた。そしてめつたなことでは死なない人間の生命といふものが、ほんとうに尊く、美しく思はれた。

この作品は、さきの「屁」とことなり、初めてハッピー・エンドであることが注目される。「久助君は、しみじみこの世はなつかしいと思つた」それは、南吉が本格的に童話というスタイルを意識してこの作品を執筆したことを示している。『新児童文化』という本格的な児童文学の雑誌に執筆するにさいして、南吉は童話というものの本質について深く思いめぐらすところがあつたにちがいない。

第七章 「嘘」——童話作家としてⅡ

続いて南吉は、『新児童文化』1941年7月号に、「嘘」を執筆する。

久助君は、おたふくにかかつて5日間学校を休んだ。6日目に登校すると、知らない少年がいた。

久助君はその少年の横顔を見てゐるうちに、奇妙な錯覚にとらはれ始めた。自分はまちがつて、よその学校へ来てしまつたのではないか、と思つたのである。いや確かにこれは、久助君の通つてゐる岩滑やなべの学校の五年の教室ではない。今読んでゐる少年を久助君は知らないのだ。さういへば先生も、なるほど久助君の受持だつた山口先生に似てはゐるが、別人であるらしい。友達の一人一人も久助君のよく知つてゐる岩滑の友達とどこか似てはゐるが、どうも知らない学校の知らない生徒達だ。五日間休んで、自分の学校を忘れてしまひ、よその学校へはいつて来たのだ。これはとんでもないことをしてのけた。久助君はそんなふうと思つたのだつた。そしてすぐ次の刹那に、やはりこれは久助君のもとの学校であるといふことがわかつて、久助君はほつとした。

しばらくつきあっているうちに、横浜から転校してきたその少年、太郎左衛門がうそつきであることがわ

かつてくる。みんなが退屈していると、その時、太郎左衛門が現れる。

その道角かどから太郎左衛門がひよつこり姿をあらはしたのである。そして彼はまつすぐみんなのところへ来ると、目を輝かせていつた。

「みんな知つてゐる？ 何か僕等が献金した愛国号がね、新舞子の海岸に今来てゐて、宙返りやなんか、いろんな曲芸をして見せるんだつて。」

何か出来事でもあればいいと思つてゐたやさきだから、みんなは太郎左衛門の言葉だつたけれどすぐ信じてしまつた。

久助君たちは、一緒にそこに行ってみると、なにもなかつた。

みんなは、もう嘘であらうが嘘でなからうが、そんなことは問題ではなかつた。たとひ愛国号がそこにゐたとしても、みんなはもう見ようとしなかつたらう。

疲れのためににぶつてしまつたみんなの頭の中に、ただ一つかういふ念おもひがあつた。——「とんだことになつてしまつた。これからどうして帰るのか。」

くたくたになつて一歩も動けなくなつて、はじめて、かう気づくのは、分別が足りないやり方である。自分達が、まだ分別の足りない子供であることを、みんなはしみじみ感じた。

子供たちは一斉に泣き出す。

そして四人はしばらく泣いてゐたが、太郎左衛門は、拾つた貝殻あしもとで足下の砂すじの上に糸をひいてゐるばかりで、泣き出さないのであつた。

泣いてゐない人のそばで泣いてゐるのは、ぐあひの悪いものである。久助君は泣きながら、ちよいちよい太郎左衛門の方を見て、太郎左衛門もいつしよに泣けばよいのに、と思つた。こいつは何といふ変な、訳のわからんやつだらう、とまたいつもの感を深くしたのである。

しばらくすると、太郎左衛門が「僕の親戚が大野にあるからね、そこへゆかう」と言い出す。

久助君も太郎左衛門をもはや信じなかつた。こいつは訳のわからぬやつなのだ、みんななどは物の考へ方がまるで違ふ、別の人間なのだ、と思ひながら、みんなに立ちまじつてゐる太郎左衛門の横顔をするどく見てゐた。すると、太郎左衛門の横顔は、そつくり狐のやうに見えるの

であった。

町の中央あたりまで来ると、「ううんと、ここだつけかな」と独り言を言いながら探している。「見つかったから、来いよ、来いよ」。

いちばんあとからついてゆきながら、久助君は、だが待てよ、と心の中でいつた。あまり有頂天になると、幸福に逃げられるといふ気がしたからであった。何しろ相手は太郎左衛門なのだから、真に受けることはできないはずだ。

さう考えると、またこんども嘘のやうに久助君には思へるのであった。

しかし、そこは本当に太郎左衛門の親戚の家だった。その小父さんが5人を電車で送ってくれることになった。

嘘吐きの太郎左衛門も、こんどだけは嘘をいはなかつた、と久助君は床にはいつたときはじめて思った。死ぬか生きるかといふどたんばでは、あいつも嘘をいはなかつた。さうしてみれば太郎左衛門も決して訳のわからぬやつではなかつたのである。

人間といふものは、ふだんどんなに考へ方が違つてゐる、訳のわからないやつでも、最後のぎりぎりのところでは、誰も同じ考へ方なのだ、つまり、人間はその根本のところではみんなよく分りあふのだ、といふことが久助君には分つたのである。すると久助君はひどく安らかな心持になつて、耳の底に残つてゐる波の音をききながら、すつと眠つてしまつた。

この結末について、続橋達雄は『南吉童話の成立と展開』（1983年、大日本図書）において以下のように指摘している。

目立つのは行動力、たくましさ¹に欠けた子どもたちの姿である。疲れはててオロオロし、太郎左衛門を除いては泣くだけであった。このあたり、作者の想像力の特徴、ひよわさ、といったものが示されている。

しかし、南吉童話の特徴は、子供が日常ふと感じる世界に対する違和の感情、やがれそれが彼らを自立へと導く、奇妙なきしみ、ズレ、崩壊の感覚を、一つのエピソードのうちに生き生きとイメージ化したところにこそある。

続橋の指摘は、おそらく第2次『新児童文化』1954

年9月号に掲載された「新美南吉の童話」において、波多野完治が、南吉の久助君ものの童話には「子供のすききらいがある」と指摘し、その原因を南吉の「肉体のよわさ」に帰しているのを踏まえている。このような根拠のない断定が一つの権威として継承されるのには驚くべきものがある。

「人間はその根本のところではみんなよく分りあふのだ」という「嘘」の肯定的な結末は、「川」(B)とおなじく、南吉の童話に対する姿勢を示している。

安城高女で生徒たちに詩を指導したことは、南吉の作品に新しい方向性を与えた。単におのれの内面を吐露するというのではなく、特定の対象にメッセージを送るという、生徒詩集に収められた作品の傾向は、それが廃刊された後、南吉の作品に生き続け、さらに童話のうちに流れ込んだといえよう。

1942年5月、南吉は、『雪とひばり』と題する、連絡機関誌を編集し、卒業生のもとへ送付している。大野秋紅「新美南吉ノート」(『安城市図書館だより』1979年1月)において次のように紹介している。

卒業生の動向を知らせるために、なんとか工面した用紙5枚で編集したのが第2次の『雪とひばり』となったのである。その間の事情は彼の「はじめのことば」に尽されている。「新緑の目にあざやかな気節になりました。みんなあなた方を送りだしてから五十日たちました。(中略)こんど級報をつくることにしました。これが第一号です。たいそう貧弱ですね。けれども紙の少ないときですからこれでがまんしなければなりません。名を僕がかつてに「雪とひばり」とつけました。いい名ではありませんか。多くの人はまだ覚えてゐることと思ひます。(中略)以上が級報『雪とひばり』の大略である。教師として、詩人としての南吉の熱意が第二次の出版を企画したが、残念ながら2号とは続かなかつた。

註

*これについては『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』第10号(2007年2月)掲載予定の拙稿「音読による授業構成の試み(5)——川端康成の『伊豆の踊子』——」を参照されたい。

〔付 記〕本稿は愛知教育大学哲学教室1996年卒業論文である稲垣玲子(旧姓)の「新美南吉中期思想研究」を踏まえて制作されたものである。文責はすべて筆者(渡辺)にある。底本として、大日本図書株式会社発行の『校定新美南吉全集』全12巻別巻2巻を使用した。
(平成18年9月8日)

